顔

創設百五十周年へ向けて

真野小学校　藤井　衛

一　はじめに

来年度、ときわ会は創設百五十周年、節目の年を迎えます。

新型コロナウイルス感染症により希薄となった会員相互のつながりを回復させるとともに新たなつながりの構築を図ります。会員一人一人がこれまでの自身の歩みを振り返り、これからの自身の未来を見つめ、発信する活動を行います。

二　本部活動の概要

①百五十周年シンボルマークの公募・選定―会員に公募し、会員の投票で決定します。

②支部活動―先輩からの志を継承する機会を設けるとともに支部会員同士で「真価を問う問い」について交流します。

③年度活動―過去十年間を振り返り、未来十年間を見通すとともに、年度会員同士で「真価を問う問い」について交流します。

④自らを問う活動―

ア真価を問う交流会への参加（オンラインを含む）

イ真価を問う問いへの回答

ウ進化し、深化する自らをデジタルポスター↓閲覧

三　佐渡支部活動の概要

佐渡支部では、ときわ会本部から示された②「支部活動」を受けて次の活動を計画します。

①先輩からの志を継承する場を設けます。

ア四月の「支部総会」でＯＢ会員の方のお話を聞く機会を設けます。

イときわ会の「真価を問う問い」を提示し宿題とします。

②「真価を問う問い」について語り合う場を設けます。

ア五月の「ルネス全体研修会」の場で教科ごとに語り合う場を設けます。

イ付箋に書いた各々の答えを発表し合い、模造紙にまとめる活動を行います。

③ＯＢ会員との絆を深める場を設けます。

ア七月の「ときわクラブ」に支部長、副支部長、三委員長が参加し、百五十周年について、本部、支部の活動を紹介します。

イＯＢの皆さんから、今後の佐渡支部の未来について語り合っていただきます。

四　真価を問う問いとは

これまでの教員生活やときわ会での活動を振り返り、自身の未来について考えるきっかけとするため、佐渡支部では次の七つから選んで各々が回答を出す予定にしています。

①ときわ会の先輩からかけられた大切な言葉

②ときわ会から何を学び、得ることができたか

③今、ときわ会員として一番がんばっていることは何か

④今後、ときわ会はどのように進化、深化していくべきか

⑤後輩に、何を一番伝え、継承していきたいか

⑥子どもに一番伝えたいこと

⑦子どもにとって学校はどのように変わっていくべきか

四　おわりに

新型コロナウイルス禍の数年間、学校生活と同様に、ときわ会の活動にも大きな制限が加えられました。希薄になった人間関係を取り戻すことは容易ではありません。酒席が無くなったことにより、一度も話したことのない会員が増加しました。しかし、この間、オンラインでの交流は充実し、ズームやチームズで抵抗なく話ができるようになりました。百五十年の伝統を持つときわ会も変革の時期を迎えています。この機会をプラスにとらえます。つながりを回復し、さらに広め、新たなつながりを構築できる会の運営を目指します。そして、本旨にもあるように「生々発展できるときわ会」を実現します。

（昭62）

はまなす抄

「三年振りの○○」について考える

両津小学校　本 間　英 一

新型コロナウイルスに振り回された三年間だったが、今年度は「三年振りの○○」という言葉が様々なところで聞かれ、久しぶりに対面で開催できたものが多い年となった。五感をフルに突き合わせ、顔と顔を使った交流の良さを多くの人が再確認できたのではないだろうか。

この三年間は、その副産物ともいえるオンラインが一気に進み、どこにいても会議に参加できるようになった。また、様々な活動のねらいや方法等を見直す時間にもなった。単に「これまでやっていたから」ではなく、子どもにとって、学校にとって本当に必要なのか、働き方改革を推進する上で続けるべきなのかなど、模索の三年間でもあった。私たちには、時代の変化に合わせ、柔軟に方法を変えていくことが求められている。

（平3）

〔特集〕個別最適な学び・協働的な学びに向けての取組

タブレットの活用で個別最適な学びへ

前浜小学校
黒田　哲平

「字を書くことが億劫」「思いや考えを表現することが苦手」という児童は、どの学級にもいるのではないだろうか。そして、対応に悩み、困っている先生方がいるのではないだろうか。

私もこの二年間、同じように悩んできた。しかし、試行錯誤した結果、一つの結論に辿り着いた。それは、タブレットを「ノートの代用として使用すること」「友達と思考を共有するツールとして使用すること」である。

まず、あらゆる角度から児童の実態を把握し、めざす児童像を明確にした。それを受けて、三つの段階に分けてアプローチをした。さらに、学級全体で取り組むことで、学級全体の学びに向かう力の底上げも図った。

第一段階として、タブレットをノートの代用（ほぼ100％）として、全授業で使用した。また、Teamsの共同編集機能を活用し、友達の考えをいつでも閲覧できるようにした。書くことは、プリント・練習問題・テストに限定した。第二段階として、タブレットをノートの代用（70％）として使用した。第一段階の書くことに、社会などの単元のまとめを加えた。第三段階として、タブレットをノートの代用（50％）として使用した。現在では、授業の内容に合わせて、児童が自分でタブレットかノートかを選択することが増えてきている。

全ての児童が積極的に授業に取り組むための一つの解決策として、試行錯誤しながら始めたタブレットの活用。時間はかかったが、思い切ってタブレットに舵を切ったことが、今の児童の姿につながっていると考えている。今後も個別最適な学びにつながるよう、試行錯誤を続けていきたい。

（平14）

個別最適な学びは子どものために

加茂小学校
小田祐樹

近年の教育のキーワードの中に、「個別最適な学び」がある。文字を見ると、個別学習のように感じるが、二〇二一年一月に出された中教審の答申を見ると、決してそのようなことはない。むしろ、協働的な学びの重要性が書かれている。以下に個別最適な学びの実現に向けた私の実践を紹介する。

「子どもが決める」

協働的な学びの実現のために、魅力的な課題を与え、ペアやグループ学習を積極的に行ってきた。しかし、ペアやグループでの活動を行うとき子どもを見ると、表情が明るい子どもの中に、数人表情が明るくない子どももいた。話を聞くと、「一人でもっと考えたかった。」ということだった。

そこで、私は魅力的な課題を設定し、そこからは、子どもに委ねるようにした。そうすると、一人でじっくり考えたい子どもは一人で考えたり、友達に確認したい子どもは確認したりと、子どもたちは、学び方を自分で選択できるようになった。そうすると表情が明るくなかった子どもも、一人で真剣に教材と対話を行っていた。そして、その子どもは、自分で解いた問題の解き方を友達に嬉しそうに説明していた。子どもは、思っていた以上に、真剣に教材と向き合っていると感じた。「学び方を自分で決める。」子どもたちにとっての個別最適な学びにつながる取組だったと感じている。

先の見えないこれからの社会を生きていく子どもたちには、自分で問題解決の方法を決めることは極めて重要であると考える。これからも子どもたちの学びの環境づくりについて考えていきたい。

（平23）

音楽の授業における個別最適な学び、協働的な学び

佐渡特別支援学校
石川雄一

　特別支援学校における音楽の授業づくりで、私が特に重要視していることは「環境構成、人的支援、教材・教具の工夫」の三点である。

　これまでの自身の授業づくりを振り返ると、器楽の授業においては、生徒全員に同じ楽譜を配り、一同に合奏する方法を採っていた。しかし、生徒からは「楽譜が読めません。」「ドレミが書いてあった方が分かる。」など、様々なつぶやきがあり、この方法には改善が必要であると感じていた。

　このことから、生徒一人一人の特性に応じ、学び方も多様化させる必要があるのではないかと次第に考えるようになった。

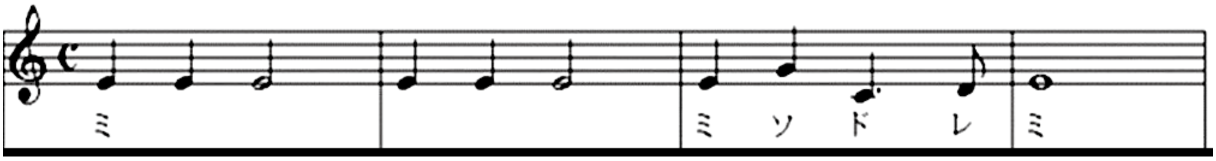
　現任校の音楽の授業において器楽の題材を取り扱った際、画像1と画像2で示したような個別の楽譜を作成した。これらの楽譜は、地域の高齢者福祉施設とオンラインで結ぶ「クリスマスコンサート」で「ジングルベル」を演奏する際に用いた楽譜である。画像1は、読譜ができる生徒への楽譜、画像2は、読譜に苦手意識をもった生徒への楽譜である。画像2の楽譜は、音名を平仮名で示すとともに、どの音を演奏したら良いか色別で判断できるように工夫した。（どは黄色、れは黒色、みは緑色、そは赤色）また、音の長さも視覚化して分かるよう、円の形を工夫した。

　練習では、教材・教具の工夫だけでなく、生徒の特性に合わせて演奏する楽器のパートや楽器の演奏法を工夫した。

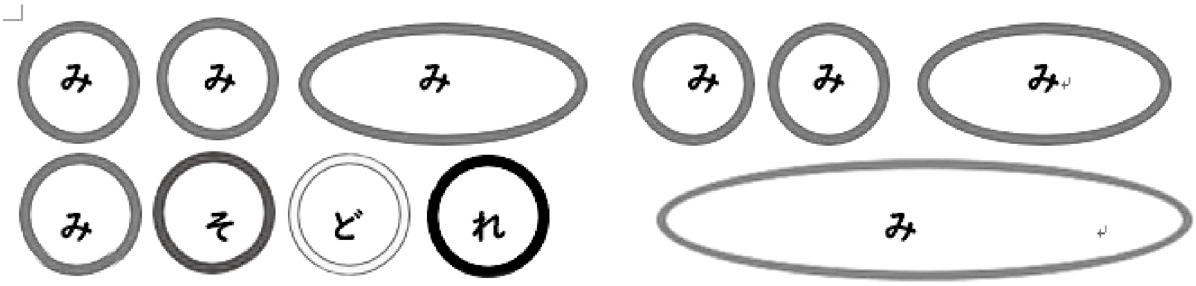
　このことにより、複数の生徒が担当するパートに自信をもって演奏できるようになってきた。そして、全体で合奏する際にも、生き生きと表現できる生徒が増加した。

　今後も、生徒数問わず、生徒一人一人をよく観察し、個々に合った教材・教具の開発を心掛けていきたい。

（平18）



画像1



画像2